

慮外者といは  
ふに同じ

「慮外者奴」

と罵りつゝ、槍を繰り出し、突き掛かりぬ  
力丸早くも此體を見て駈け來れり

「下郎奴、すざれ」

聲を勵まして叱りつけ、三尺二寸の太刀を揮り翳ざし  
て斬つて掛かる

折りしも小書院の方に當りて、鬨の聲高く起りぬ

「素破御座所に攻め入りしところ覺ゆれ、上様の御身  
の上心元なし」

蘭丸忽ち此處を打ち捨て、小書院の方へ馳せ行きけ  
る

左らば此敵を喰ひ止めんと、力丸満身の勇を振ひ、踏み

込み、火花を散らして奮ひ闘ふ

又兵衛蘭丸を逐はんとすれども叶はず

「左らば此敵より討ち止めん」

無二無三に突き掛かる

接戦十餘合、天暑くして汗玉の如し

如何にやしけん、力丸不意に躓ぎ倒る、又兵衛得たり

と附け入り、難なく突き伏せて首を搔きける

既にして坊丸も亦た討たれぬ、蘭丸も亦た尋で殺され

ぬ、兄弟三人、同じ日、同じ所にて君に殉へるぞ勇ましき

野史氏曰く、森氏の兄弟、並び忠にして並び勇真に兄  
たり難く、弟たり難し、與に少年の龜鑑たるに足る



上田重安十六歳にして猛將を倒す

父は信行を  
曰ふ  
舅は光秀を

上田重安幼名は左太郎、主水正と稱し、宗古と號す、甚  
右衛門重元の子なり、幼にして丹羽長秀に仕ふ、十六  
歳にして織田七兵衛尉信澄を倒す、後ち淺野幸長に  
仕へて老職となる、之れを男爵上田龜三郎の祖とす  
織田信長四國を攻めんとす、三男信孝は丹羽長秀と與  
に進んで大阪に陣し、甥僧澄は攝州尼ヶ崎に次す  
既にして明智光秀叛して信長を弑しぬ、飛報尼ヶ崎に  
到るや、信澄大に打ち喜ぶ  
「右大臣殿は我が爲めには父の仇なり、時節なくして  
今まで討ち漏らしけるを、計らずも我が舅の手をも

三七とは信  
孝の事

七兵衛とは  
信澄の事

て討ち取りしこそ心地好けれ、此上は大阪に馳せ上  
りて三七を討ち取り、舅光秀に力を合はすべし』  
即時に用意を調べ、屈竟の従士三十六人を引き連れて  
大阪へと馳せ向ふ  
大阪にても信澄を討たんとの評議開かれぬ、信孝長秀  
に向ひて告げゝる  
『七兵衛は日頃我父を怨むばかりか、婿舅の間柄なれ  
ば、必定光秀に力を合はすべし、若かじ七兵衛を召し  
寄せて討ち取らんには』  
長秀實にも同意し、尙ほも手筈を打ち合はす折りし  
も、信澄大阪に馳せ向ふべしとの内報來りぬ  
『左らば此方より召し寄すまでもなし、彼れより來る



を待つて討ち取らんこそ好けれ、去るにても七兵衛  
は一門中の剛の者なり、容易には手に合ふまじ、峰山  
竹右衛門、山路段右衛門、兩人して討ち取り候へ、萬一  
手に餘らん時には」

言ひ掛けて思案せる折りしも

「其時は某に任せ玉ふべし」

と言ひつゝ、席を進み出づるは上田重安

「七兵衛殿、假令鬼神を欺く勇ありとも、某必らず討ち

取り候べし、御心安く思し召せ」

言葉涼しく言ひ放てば、信孝始め何れも心強くぞ思ひ

ける

斯かるべしとも知らぬ信澄、程なく大阪に着きければ

去り氣なき振りにて、信孝の本陣へと伺候しける

峰山、山路の兩人出で迎へて、式臺に平伏し、先に立ちて

案内す

信澄跡に續いて客殿に通る所を

「七兵衛殿、御覺悟あれ」

言ひも終らず、兩人刃を揃へて斬つて掛かりぬ

扱ては敵に用意ありしと覺えたり、残念よと思ひつゝ、

二尺三寸の大脇差を抜き放つて切り結ぶ

「三七殿の家來、亂心しつるぞ、七兵衛の侍共、疾く來れ」

信澄、大音聲に呼はりければ、素破事ぞと三十六人、皆太

刀を抜き連れて躍り入り、戰鬥忽ち其處此處に起る

峰山、山路の兩人、左右より切つて掛かるを、大剛の信澄



事ともせず、一聲エ、と喚いて峰山の右の臂を斬つて  
 落し、更に山路の左の頬に斫り付け、る  
 斯くとも見るより上田重安矢庭に躍り出づ  
 『日頃の噂にも似ぬ御太刀風かな、それしきの御力に  
 て我れを相手と仕玉ふこそ御果報なれ、御首は重安  
 賜はり申すべし』  
 二尺九寸の太刀を抜いて切つて掛かる、信澄見るより  
 冷笑ふ  
 『推参なる小倅かな、イデ此世の邊を取らすべし』  
 太刀尖き鋭く切つて掛かるを、重安飛鳥の如くに身を  
 躍らし、忽ち一刀サツと信澄の肩先き深く斫り下げた  
 り

碌々とは役  
 のと云ふ事

今、是れまでぞと信澄客殿指して走せ出だすを、重安  
 隙間もなく逐ひ絶り、終に難なく斬り伏せけり  
 『上田左太郎織田七兵衛尉信澄殿を討ち取つたり』  
 大音聲に名乗りつゝ、忽ち首を掻き切つて差上げぬ  
 三十六人の従士意氣頓に挫けぬ、或は討たれ、或は傷つ  
 き、辛うじて遁れ去るもの僅かに數人  
 野史氏曰く、重安淺野家に仕へて一萬石を領し、日々  
 に茶事に耽る、衆笑つて曰く、流石は大國なり、萬石の  
 茶湯坊主を扶持すと、後ち大阪夏陣の時、敵將山縣三  
 郎右衛門を斬り、其首を提げ歸りて、列座の將士に謂  
 つて曰く、公等碌々、茶湯坊主に劣ること遠しと、其剛  
 勇率ね此類



齋藤利光十六歳にして  
敵の勇士を仆す

齋藤利光伊豆守と稱す内藏助利三の長子なり利三は明智光秀の甥なり山崎の戦利光父と與に奮闘し敵の勇士野々垣彦之丞と水中に戦ふて其首を獲父と別れて寺に入り剃髮して立本と號す時に年十六後ち春日局の兄たるを以て徳川氏に仕へ佐渡守利宗と改む  
明智光秀山崎の戦に敗れて辛くも勝龍寺に遁れ入りぬ

織田信孝羽柴秀吉の兵勝に乗じて追撃す勢益々急なり  
利三父子殘兵を率ゐて五倍子川の畔に陣し信孝の近づくを待ちて不意に弓銃を發つ

「素破こそ敵なれ」

信孝の兵俄かに慌てふためく忽ち一騎陣頭に躍り出づ

「これは三七殿の御内野々垣彦之丞と申するものなり逆賊明智の餘類遁すまじ」

と呼はりつゝザンブと川に飛び込み此方を目掛けて  
洒ぎ來る  
利光斯くと見るより手早く鎧を脱ぎ棄て素膚に太刀



を佩びて是れも水中に飛び込みぬ  
『我れは齋藤内藏助の嫡男伊豆守利光なり、イデ汝の  
首を貫ひ受くべし』

拔手を切つて進み近づき、ムツと彦之丞に組み付きさ  
ま、曳々聲を掛けて揉み合ひける  
兩軍岸を挟みて群がり立ち、勝負如何にと堅唾を呑ん  
で見物す

利光は大力の少年なり、忽ち彦之丞を取つて捻ち伏せ  
たる途端、二人共に水底深く沈みぬ

『這は如何に爲し玉へるぞ』  
利三の部下驚き騒ぎ、具足を釋きて水中に飛び入らんとす

『待て、騒ぐべからず』

利三手を舉げて部下を制す

『武士の子の十六歳は男の盛りなるに、一人の敵を打ち損ずるやうにては、此後ち用に立つまじきぞ、面々の志は殊勝なれども、唯捨て置きて其成行きを見るこそ好けれ』

自若として驚かず、部下の者共今は詮術なし、手に汗を握りて空しく川面を見詰め居ける

少々ありて下の瀬忽ち波立ちけるよと見るうち、利光  
スツと顔を顯はし、これ見よとばかり高く彦之丞の首  
を差し揚げぬ  
『あれ〜』



と一同動搖めく瞬間、又も水中に沈み入りしが、味方の陣前に現はれ出で、突と陸に躍り上がる

「能くこそ仕つれ、組打ちは力と氣とのかね合ひにて、

勝つも負けるも左のみ珍らしからず、唯水中の働きをこそ手柄と申すべけれ」

利三褒むれども、左して喜ばず

「父も父なり、子も子なり」

部下何れも感じ合はざるはなかりき

野史氏曰く、光秀の叛旗を翻へさんとするや、利三切

に其不可を諫む、言聽かれざるに及び、已むを得ずし

て之に従ふ、其志憐むべしと雖も、亦た堯に吠ゆるの

築狗たるを免かれず、利光亦た然り、唯其少壯にして

勇武強敵に逢ふて怖れざるの一事、是れ探りて以て録する所以

稲田元頼十六歳にして主君を直諫す

稲田元頼通稱は九郎兵衛、大炊の子なり、蜂須賀阿波守家政に仕て老職となる、慶長十九年、關東大阪の和親將さに破れんとす、兩家各々使を遣はして招く、家政沈吟未だ決せず、松原内匠關東へ屬せんことを勸む、家政之れに従ふ、元頼時に年十六、大に其不可を極諫す

沈吟とは思居るに暮れて



去就とはド  
チラに屬し  
ドチラに背  
くかと云ふ  
事

大阪の使者來りぬ、家政未だ答へず、關東の使者亦た來りぬ。家政獨り一室に入り、兩家の書を把つて見つゝ、沈吟未だ決せず。稲田元頼、松原内匠等其席に入り來る。『君何を打ち案じ玉へる』。家政兩家の書を示して去就を問ひぬ。『西に屬せんか、東に附かんか、利害何れに在るべきや』。内匠關東に屬するの利益を説きぬ、家政の意も亦た此に在り。『好し、左らば關東に隨身せん』。喜びて之れに従はんとなす。

元頼聞くより泣然として涙を濺ぎぬ。『玉と爲りて碎くるとも、瓦と爲りて全うする勿れとこそ申し候へ、關東方假令ひ兵衆く勢盛んなりと雖も、争かた故太閤の御恩を忘れて之れに従はれ候べき、不義の名を蒙ふり候ては、如何に御運開け、御子孫榮え玉へばとて、何の喜ぶべきことか候はん、潔よく大阪方に御加勢あらせ玉はんこと、實に武門の道、武士の本望にこそ候べけれ』。憚かる色もなく諫めける。家政忽ち赫と怒れり。『汝は若年なりと雖も、父大炊の忠義を思へばこそ老職をも申付けたるなれ、然るに早や既に高慢の心を



素餐とは祿  
盗人と云ふ  
事

生じて、妄りに諫言がましき口を叩くこそ奇怪なれ、  
 我れ既に七十に近し、何ぞ乳臭き汝の言を待ちて是  
 非曲直を知らんや、慮外なり、控へ居れよ』  
 ハツタと睨めつゝ、叱り罵しる、元頼莞爾として打ち笑  
 みぬ  
 『其職に居て其責を盡さざるを素餐と申し候とかや、  
 齢に老少の別こそあれ、責に厚薄の分ちありとしも  
 覚え候はず、君の悪に進み玉ふを見て、黙して諫めざ  
 るこそ臣たるの道に背き候なれ』  
 容を正して述べぬ、家政益々怒れり  
 『汝尙ほ口を叩かば、唯一刀に切つて捨てん、控へ居れ』  
 聲も荒く、辭も厲し、元頼毫しも恐るゝ色あらず

端然とは容  
形を正する  
容

『臣の命は君に捧げ奉つり候なり、御手打ち遊ばさる  
 るとて何の厭ふことか候はん、君を諫めて死なんこ  
 そ臣の望む所に候なれ、イザ首討たせ玉へ、息あらん  
 間は黙止し候まじ』  
 死を決して述べ立つれば、家政眼を釣り、齒を切みぬ  
 『好し左らば覺悟致せ』  
 スラリと一刀を引き抜けば、元頼端然として首を差し  
 伸べぬ  
 家政サツと刀を揮り上げたる途端  
 『暫らく、暫らく待たせ玉ふべし』  
 イキナリ馳せ來りて家政を押し隔てしは嫡子長門守  
 至鎮なり、委細を聞いて是れも亦父を諫む



左れども家政の心既に決す

『今は安危如何とこそ問ふべけれ、理非を論すべき時

にはあらず、汝等復た言ふこと勿れ』

袖を拂ふて奥へと入る、跡見送りて至鎮ハラくと涙

を垂る

『今は詮なし、此上は父の心に従ひ、天晴れ高名して、諸

人の眼を覺させかし』

力なく、元頼を諭しぬ、今は争はん力なし、終に其

意に従ひけるこそ是非なけれ

野史氏曰く、進退去就の決は唯理非如何に在るのみ、

利害如何に存せざるなり、然るに豊臣氏恩顧の諸將

皆利害に由りて去就を決し、復た理非に由りて進退

を決せず、何ぞ獨り一峰須賀氏のみ咎めんや、元頼

の極諫、言々痛快、凜乎として生氣あり、光彩あり、人を

して自から襟を正さしむ

松平忠昌十六歳にして奮闘す

松平忠昌は越前中納言秀康の第二子なり、小字を虎

之助と曰ふ、十一歳の時、江戸に抵りて將軍秀忠に謁

す、秀忠留めて左右に置き、愛撫すること子の如し、十

六歳にして大阪の冬陣に従ひ、明年亦た夏陣に従ひ

て奮闘す

(上)



本營とは本陣の事

冬陣始まりぬ、忠昌も亦た従ふ  
 諸將皆戦へども、將軍の本營に在る身は自から槍を把つて戦ふの機なし、血氣の忠昌齒痒きこと謂ふばかりなし  
 一夜、城將真田幸村不意に將軍の營を襲ひぬ  
 『戦はんは今ぞ』  
 忠昌勇を鼓して奮ひ戦ふ  
 既にして幸村兵を收めて退く  
 『穢なし幸村返せ』  
 忠昌大音に呼ばり、跡を追ふて柵の際まで押し寄せける  
 幸村難なく城中に入りぬ、篝火の光に忠昌を透し見つけける

つ、聲を張り上げて問ひ掛けぬ  
 『天晴れ健氣なる御大將や、名を名乗り玉ふべし』  
 忠昌既に幸村を失して、無念謂はん方なし  
 『左言ふは真田殿ならずや、我れこそは越前の松平虎之助忠昌なれ、イザ出で、勝負を決し玉へ』  
 手綱を絞りて呼び掛けたり  
 士卒銃を發ちて打たんとす、幸村手を舉げて制しぬ  
 『扱ては故中納言殿の公達にこそ在はすらめ、斯かる勇武の大將を飛道具に掛けんこと無用なり』  
 三好清海入道を召して云々と命じける  
 入道乃ち武器を脱ぎ棄て、陣門を開きて出で來る  
 『これは左衛門尉よりの使者に候、左衛門尉申して候』



今晚の御振舞こそ天晴れと存じ奉つれ、諸手の者共  
 鐵砲にて打ち取り奉つらんと逸り候へども、幸村固  
 く制し止めて候、御勇氣に感じて末廣進上致し候な  
 り」  
 口上終りて扇子を捧げ出だせば、忠昌快よく受け納め  
 ぬ  
 『無双の勇將眞田殿よりの御贈物、近頃以て忝なし、幾  
 久しく御武勇に縁かり候べし、使者太儀』  
 忠昌馬を回へして悠々と引き返す、敵も味方も聞き傳  
 へて、實に陣中の美談ぞと感合ひける  
 (下)  
 戦雲一たび霽れて又忽ちに掩ひぬ

忠昌復たも夏陣に従ひて、兄忠直と與に幸村の軍と激  
 戦す  
 忽ち敵の陣中より大兵の勇士躍り出づ  
 『我れこそは念入左太夫と申すものにて候なれ』  
 槍を捻つて突いて掛かる  
 『左らば參る』  
 忠昌亦た十文字の槍を扱きて奮ひ戦ふ  
 敵は大剛の勇士、此方は血氣壯んの猛將、兩々火花を散  
 らして戦ふこと十數合、勝敗容易に決せず  
 『イザ組まん』  
 カラリと柄物を投げ棄て、兩雄引つ組んで馬より落ち、  
 上になり、下になり、曳々聲を發ちて奮ひ闘ふ、忠昌の力



兩將軍とは  
家康秀忠の  
事

や優りけん、終に左太夫の首を掻き切りぬ  
十文字槍の片鎌此時突き折れける  
左太夫の首を本陣に差し送りければ、兩將軍の御感淺  
からず

「拔群の働きぞ」

與に其武勇を賞讃せられける  
忠昌更に進み戦ひ、手兵二十三騎を以て敵の首を取る

こと五十有七級

幸村終に討たれぬ

野史氏曰く、忠昌兄弟皆勇猛なり、兄忠直、弟直政皆戦  
功を樹つ、而して忠昌の自から勇士念入左太夫を討  
ちたるの一事、最も壯絶たり

眞田大助十六歳にして主君に殉ず

雌雄を決す  
るには勝負  
を決する事

眞田大助名は幸昌、左衛門尉幸村の長子なり、父に従  
ふて大阪城に在り、屢々出で、敵軍を衝く、幸村の死  
を決するや、大助をして還りて秀頼に侍せしむ、秀頼  
自殺するに及び、大助亦た自及す、時に年十六  
戦荐りに敗れて諸將多く死す、城中色を失ひ、一擧して  
雌雄を決せんとす

幸村一策を献じぬ  
「臣茶臼山に出で、敵を誘ひ候べければ、一隊は船場  
より今宮の南に出で、火を敵の背後に縦ちて中軍を  
挾撃致し候はん、其時君は旗鼓堂々として御出馬あ



大旆とは大將軍の旗の事

らせ玉は、或は勝利を得候はんか、最早や此他に策は候はず』

秀頼之れを容れぬ、衆皆之れに同じぬ、事立ちどころに決す

天はホノノと明けぬ、今日ぞ愈々天下分目の戦なる

幸村兵を提げて出で、茶白山に陣す、六文銭の旗幟高く南風に翻へる

味方の諸軍望み見て意氣振ひぬ、將さに大旆の出づるを待つて血戦せんとす

秀頼出で、櫻門に在り、錦の袍を穿ち、緋の鎧を撰く、太閤東征の儀式に倣ひて軍容特に堂々たり

秀頼今や馬を進めんとする時、敵の術策に陥りて俄

かに止まりぬ

幸村高處に登り見れども、秀頼の軍終に來らず

『中軍何とて來らざる、扱ては又候邪魔の入りしと覺ゆるぞ』

大助を傍近く召して告げぬ

『我が兄關東に従ひ玉へばにや、大野等常に我れを疑ひぬ、我が策復た成らず、今日ぞ愈々死すべきの時なる、汝是れより城に還り、君の御傍に侍して、我れに貳心なきを明かし候へ』

大助更に聽き入れず

『争かて父上を棄て、獨り立ち去り候べきや、冥途の御伴をこそ致し候べけれ』



幸村聲を厲まして叱りぬ  
 『汝此處に死すれば、誰れかは我が志を明かすべき、城に還ればとて生きよと申すにはあらず、君に殉ふて死すべき時も目の前ぞ』  
 大助今は争はんやうもあらず、泣くく訣を告げて城へと引き返す  
 東軍競ひ進みぬ、城兵勢支へず  
 大助還りて城に入れば、秀頼尚ほ櫻門に在り、悠然として床几に凭れり  
 大助跪づきて父の遺命を述べぬ、言畢らざるに早や潰兵潮の如くに遁れ来る  
 今は此處にも居るべからず、秀頼還りて千疊敷に入り

伊豆とは伯父信之の事

ぬ、大助亦た跡より従ひて行く  
 東軍早や諸門を破りて込み入りぬ  
 『今は是れまでぞ』  
 諸將皆腹搔き切つて失せける  
 秀頼備倉に移りぬ、大助亦た跡より従ふ、人々大助に諭しぬ  
 『今は譜代恩顧のものさへ皆落ち行き候ひぬ、御身は客將の子なれば、君に殉ひ参らするにも及び候まじ、此處を遁れて伊豆殿を頼り玉はんこそ然るべけれ』  
 大助首を掉りて肯かず  
 『イヤ、父は君に殉ひ奉つれとこそ申して候へ、此處を遁れんこと父の意にあらず、某の志にも候はじ』



倉の外に藁を敷きて座しぬ、食事せざる。こと一晝夜、城外より將士の遁れ還る毎に、父や如何にと其容子を尋ね問ひぬ。

既にして秀頼終に自及す、大助左らばと又自殺しける。野史氏曰く、真田氏の一門皆智謀勇武を以て鳴り、少壯にして能く武功を立つ、然り而して大助の末路最も悲壯、人をして涕淚滂沱禁ずる能はざらしむ。

西川勝太郎等十六七歳にして  
國難に殉す

明治元年、會津岩箄の守を失ふや、白虎隊進んで官兵

屠腹とは切腹の事

を戸口原に拒ぎ、戦敗れて飯盛山に走り、屠腹して死するもの十六人、西川勝太郎、井深繁太郎、有賀織之助、林八十治、永瀬雄治、石田和助、飯沼貞吉、以上十六、篠田儀三郎、津川喜代美、安達藤三郎、野村駒四郎、築瀬勝三郎、築瀬武治、間瀬源七郎、伊東俊彦、鈴木源吉、以上十七、實に八月二十三日なり。

(上)

石箄の守既に破れぬ、官軍長驅して會津の城に迫らんとす。

白虎隊出で、戸口原に邀へ戦ふ、一隊皆壯年血氣の士、彈雨を浴び、砲烟に咽びつゝ、奮ひ戦ふ、軍容勇しとも勇し。



左れども彼れ衆、我れ寡、争でか永く支へ得べき、馬は傷つき、兵は殪る。隊長日向内記先づ走り、原田克吉亦た續いて逃がる、跡に残れるは唯十六士。十六士勇ありと雖も亦た奈何ともすべからず、夜暗に乗じて飯盛山へと走る。既にして天明けぬ。敵は早や瀧澤坂に在り、追撃頗ぶる急、彈丸鳴つて頭上を過ぐ。暫し身を洞中に避けぬ、銃聲稍々薄らぐを待ちて、又も出で、山上に登りぬ。俯して城下を視れば、轟々たる砲聲地に震ひ、濛々たる

参差と長  
短しから  
齋貌即ち  
アチヲ向  
さるヲ向  
向きテ斃  
居る事斃  
れる

烟塵天を掩へり、城の陥るる眼前に在り。十六士相見て慨然たり。『敵既に城下に入りぬ、我等飢る疲れて復た戦ふべくもあらず、敵の手に死せんは残念なり、若かず一死主君に報ひ奉つらんには』  
跪いて城を拜しぬ、一同環り座して屠腹す、死を視るこ  
と歸るが如し

(下)

我子生けるか、死せるか、香として何の消息もあらず。藩士印出某の妻、敵の眼を忍び、て其行衛を捜しぬ。索め、て飯盛山に抵れば、少年の死屍参差として打ち斃る。



氣息奄々と  
は片息で居  
る事

『オ、我子も此中にや在らん』  
 一々死骸を認め見れども、それぞと思ふ者あらず  
 中なる一人氣息奄々として尙ほ絶えず、其年頃我子に  
 似たり、妻棄て去るに忍びず、負ひ歸りて治療を加へけ  
 るに、傷幸ひに癒えぬ、是れぞ飯沼貞吉なる  
 忠魂、今安くにか在る、飯盛山頭雲慘み、風吼ゆ  
 野史氏曰く、君臣城を枕にして斃れ、老若敵に赴いて  
 死せんと欲す、古來武士道の本色を發揮せるもの、當  
 時の會津藩に若くはあらず、十六士の最期悲壯凛烈  
 なる、亦其一證として見るべし

第二少年武士道 終



著作 所有

明治四十一年六月三日印刷  
 明治四十一年六月六日發兌

第二少年武士道  
 定價金四十錢

著 作者

熊田宗次郎



發 行者

伊東芳次郎

印 刷 者

山田英二

東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所

東京市本郷區電話下谷二九三八  
 本郷一丁目九番替貯金一七一

東亞堂書房

特約大賣捌所

東京市神田區表神保町三  
 振替貯金二七〇

東京堂書店

特約大賣捌所

大阪市東區南渡邊町四十三  
 振替貯金二八二三

杉本書店

大賣捌

(東) 上田屋、東海堂、文林堂  
 (京) 前川書店、北隆館、武藏屋  
 (市) 至誠堂、林平、二松堂

(京都市) 若林書店  
 (名古屋) 川瀬書店  
 (名古屋) 星野書店

(久留米) 菊竹書店  
 (熊本市) 長崎書店  
 (札幌市) 富貴堂書店

(弘前市) 今泉書店  
 (新潟市) 萬松堂書店  
 (富山市) 福田書店



●好評再版出來!!!

報知新聞記者 熊田葦城先生著 三浦北峽先生畫

賜天覽

# 少年武士道 第一

中判美裝  
全三冊二百餘頁  
定價四十錢  
郵稅六錢

第二少年武士道に收められたる以外の、三十五小英雄を輯む、第二少年武士道を閲讀せられたる諸子は亦必ず本書をも併せ讀むの必要あり。

●好評再版出來!!!

## 東亞堂發兌修養書類

堀内新泉先生著 立志 小説 **全力の人** (前篇) 定價六十五錢 郵稅八錢

堀内新泉先生著 立志 小説 **全力の人** (後篇) 定價 郵稅

堀内新泉先生著 時間活用法 定價六十錢 郵稅八錢

堀内新泉先生著 人格と運命 定價五十錢 郵稅八錢

加藤咄堂先生著 人格之養成 定價五十錢 郵稅六錢

加藤咄堂先生著 補增 **冥想論** 定價五十錢 郵稅八錢

幸田露伴先生序 加藤咄堂先生著 **朝思暮想** 定價六十錢 郵稅八錢

加藤咄堂先生著 **雄辯法** 定價七十錢 並製各八十錢 郵稅

加藤咄堂先生著 修養 逸話 **話し草** 定價四十錢 郵稅六錢

大内青巒居士序 釋 悟庵師著 **禪と修養** 定價五十錢 郵稅八錢

釋宗演師題詞 渡邊子爵著 破庵禪居士著 **禪と活動** 定價四十五錢 郵稅六錢

破庵禪居士著 **偉人修養史** 全一冊(近刊)

萬朝報記者 茅原華山先生著 世 文明推移史論 定價五十錢 郵稅八錢

木村醫學士校閱 漆山又四郎氏著 **腦力養成法** 定價四十五錢 郵稅六錢

足立栗園先生著 鍛鍊 **養氣法** 定價五十五錢 郵稅六錢

村田犀川先生著 **決斷力の養成** 全一冊(近刊)



31  
482

類書學文兌發堂亞東

沼波瓊音先生著 <b>俳句階梯</b> 定價三十錢 郵稅四錢	佐々醒雪先生序 沼波瓊音先生著 <b>俳句講話</b> 定價四十錢 郵稅六錢	久保天隨先生序 沼波瓊音先生著 <b>俳句研究</b> 定價四十錢 郵稅六錢	沼波瓊音先生闕 角垣宮人先生著 <b>俳味禪味</b> 定價四十錢 郵稅四錢	柳塘僊史先生著 漢詩講話 附(俳句と漢詩) 定價五十錢 郵稅六錢	武島羽衣先生序 志賀華仙先生著 <b>和歌作法</b> 定價三十錢 郵稅四錢	佐藤仁之助氏著 新案百人一首通解 定價二十錢 郵稅二錢	佐藤仁之助氏著 <b>日本文法解義</b> 定價四十五錢 郵稅六錢
幸田露伴先生著 小春雨集 定價七十五錢 郵稅八錢	幸田露伴先生著 <b>潮待ち草</b> 定價八十五錢 郵稅八錢	幸田露伴先生著註 沼田穎川先生註釋 <b>二日物語</b> 定價四十錢 郵稅四錢	楓村居士著 樗俠雄錄 定價六十錢 郵稅八錢	高濱虛子先生 外三氏共著 <b>新寫生文</b> 定價五十錢 郵稅六錢	秋元蘆風先生著 シルレル詩集 定價四十錢 郵稅四錢	山口小太郎氏序 秋元蘆風先生著 シルレル鐘の歌評釋 定價七十錢 郵稅四錢	德富蘆花先生序 角田劔南先生著 時文評論 <b>趣情景</b> 定價四十錢 郵稅六錢



31  
482



5



31  
482



